

九州時代の作品に見る陶晶孫の恋愛観

廖 莉 平
(中国・電子科技大学)

1 はじめに

創造社のメンバーであった成仿吾は「創造社の主題はおおよそ男女の問題に関するものである」¹⁾と述べている。いうまでもなく、ここでの「男女の問題」はつまり〈恋愛〉のことである。成仿吾のこの言葉から創造社初期の作品内容を容易にうかがうことができよう。

ところで、〈恋愛〉という言葉は日本人が英語の〈love〉を翻訳するときに作られ、十九世紀末または二十世紀の初めごろ、日本で留学する中国人留学生によって中国に紹介された言葉である²⁾。また、郭沫若や田漢などが日本に留学していた時期には、日本で恋愛観について盛んに論じられていた³⁾。このような背景があったためだろうか、中国における二十世紀初期の恋愛観について考察する際には、日本への留学経験のある創造社のメンバーの恋愛観と日本との関連性についての研究が、度々取り上げられてきた⁴⁾。しかし、恋愛小説を中心に創作活動を行ってきた陶晶孫の恋愛観についての研究は看過されてきた。それは、おそらく次の二つの原因があると言えよう。

一つ目は、陶晶孫の中国語作品、特に九州時代の作品にはところどころ屈折したところもあれば、日本語的な言い回しも作中で夥しく織り込まれているため、日本語を学んだことがない中国人研究者にとっても、中国語を学んだことがある日本人研究者にとっても、陶晶孫の作品を読み取ることは生易しいことではないこと。二つ目は、日中戦争中に上海に留まった陶晶孫は、日本当局によって管理されていた上海自然科学研究所の研究員として働いたり、一九四四年に南京で行われた第三回大東亜文学者大会に参加したりしたため、中華人民共和国建国後「漢奸」と見做される傾向があったことである⁵⁾。

陶晶孫は創造社の中心メンバーではないが、初期から創造社の活動に関与していた人物の一人である。創造社の草創期に当たる一九二一年ごろ、団体の名前の是非や方針などについて、郭沫若は陶晶孫と熱く語りあったこともあり、また、陶晶孫の楽譜を載せるために、『創造季刊』第二号から書式を横書きに変更したことから、創造社初期における陶晶孫の存在が無視できないものであることがわかるだろう。

周知のように、陶晶孫はもともと医者であり、文学者としては同時代の郭沫若、郁達夫と比べ、それほど作品を残していない。しかも、彼が意欲的に小説を書いていたのは九州帝国大学に入ってから一九二九年に日本を引き上げ中国に戻るまでのわずか十年間である。この時期に書かれた代表的な作品は『音楽会小曲』という書物にまとめられ、一九二七年十月に上海創造社出版社により出版された。『音楽会小曲』は短編作品十九篇と「後書き」により構成されており、「水葬」「理学士」「特選留学生」「Cafe pipeau 的廣告」四篇のほかはすべて恋愛小説である。帰国した陶晶孫は積極的に文学活動に

関わろうとしていたが⁶⁾、これ以後の作品はほとんどが評論と随筆に属する文章である。

陶晶孫の恋愛観をみるならば、無論恋愛について彼が直接に書いた感想文や評論文などを考察することが最もよいことであるが、残念なことに彼は「恋愛と結婚」(「恋愛と結婚」)⁷⁾という二百五十字ぐらいのエッセイ以外に、恋愛については真正面から論じたことがない。日本で恋愛スキャンダルが多発し、恋愛論ブームが起きた大正時代は、陶晶孫にとって多感かつ恋愛に花咲く時期であった。陶晶孫は郭沫若と田漢のように恋愛について熱く語っていないものの、恋愛に対する思いを作品を通じて読者に訴えているのである。

かつて、陶晶孫は自分の作品の中で最も好きなものは九州時代の作品だと語ったことがある⁸⁾。九州時代は陶晶孫の文学活動において草創期に当たると言え、彼もこの時期の作品は幼稚だったと自覚している⁹⁾。しかしそれにもかかわらず、彼自身が好んだのは、やはり九州時代の作品であった。また、九州時代の作品はいずれも恋愛について描かれている。それゆえ、作品を通して陶晶孫の恋愛観を考察するならば、この九州時代の作品を読み取らなければならないのである。

2 九州時代の作品について

陶晶孫は一九一九年九月に九州帝国大学に入学、一九二三年三月に卒業し、福岡で三年半の歳月を過ごした。彼の作品でこの期間に書かれたと確認できるのは、『創造季刊』に発表された小説「木犀」、戯曲「黒衣人」と「尼庵」以外に、短編小説「洋娃娃」(「西洋人形」——引用者注)と「剪春蘿」である。

戯曲「黒衣人」は五篇の作品の中で、初めて中国文壇に発表された作品である。象徴手法を用いたこの作品は発表当初から好評を博しながらも、その一方で作品にみられる神秘性について酷評もされた¹⁰⁾。現在では中国の象徴劇の中で最も典型的な作品と¹¹⁾評価されているこの作品が当時の知識人に完全に理解されるのは到底無理なことであっただろうことは、作品発表当時の中国文壇の事情を考えれば、容易に理解できる。作品は二人の兄弟の死を巡って展開する一幕劇であり、一見すればあたかも〈死の賛美〉を描いているように読み取れる。しかし、筆者の考察によると、作品は兄弟の死を通して大人に対する嫌悪感および純粋な愛に憧れる兄弟を描いていると考えられるのである¹²⁾。

五篇の作品のなかで最も名高く人々によく知られているのは「木犀」であろう。陶晶孫は元来日本語で「Croire en destinée」¹³⁾(「運命を信じる」——引用者注)と書いていたが、郭沫若の勧めで中国語に訳し、タイトルまで「木犀」に変更させられたという¹⁴⁾。

中国語版「木犀」が初めて世に出たのは『創造季刊』の第一巻第三期(1922. 11)であった。作品は一種の回想体の小説である。冒頭と結末の部分は現実に置かれた主人公素威の身の出来事が描かれている。作品の核に当たる回想の部分が、枠物語を構成し、その内容は主人公と小学校の英語教師Toshikoの再会から、恋の自覚、恋の発展、恋の破綻で成り立っている。

「木犀」が発表された一九二二年十一月は、陶晶孫の初期文学活動の中で最も旺盛に創作がなされた時期だといえる。九州時代に書かれた五篇の作品のうち、実に三篇もがこの時期に書き上げられているのである。それは「洋娃娃」(11月5日)、「剪春蘿」(11月13日)と「尼庵」(12月3日)である。「洋娃娃」は「木犀」と同様、教師と教え子の間の恋愛物語が描かれている。ただし、男子生徒と女性教師の恋愛について描かれている「木犀」に対して、「洋娃娃」は男性教師と女子生徒との恋愛が描かれている。両作品における共通の話題や人物設定などからみれば、「洋娃娃」はまさに「木犀」の延

長線上にあるといえる¹⁵⁾。「剪春蘿」は、陶晶孫が九州帝国大学で身につけた精神医学知識を自分の作品に取り入れ、学校の寮で生活する二人の生徒の恋の萌芽、発展、不安による溺死について描かれている作品である。「尼庵」は九州時代の最後の作品であり、兄妹の恋愛を巡って描かれている。

上述したように、留日期间に、陶晶孫が書き上げた作品はほとんどが恋をテーマにしたものである。しかし、同じ恋愛物語にしても、九州時代の作品はその後のものと甚だ異なるところがある。それは、九州時代以後の恋愛物語は世間に認められる正常な愛を描いているのに対して、九州時代の恋愛物語はすべてタブーの愛について描かれているところである。「木犀」と「洋娃娃」における教師と生徒の愛、「黒衣人」と「尼庵」における兄弟姉妹の愛、「剪春蘿」の同性の生徒同士の愛。このような世間に禁じられた恋に、陶晶孫はいかなる気持ちを織り込んだのか、それを明らかにすることによって、陶晶孫の恋愛観の一面をうかがうことができよう。

これら九州時代の恋愛小説のなかで、〈恋愛〉とはいかなるものかについて作品中で直接自らの考えの一端を吐露しているのは「尼庵」をおいてほかにはない。したがって、九州時代の作品から陶晶孫の恋愛観を解剖するためにはこの「尼庵」を看過してはならない。

3 「尼庵」にみられる陶晶孫の恋愛観

ここで「尼庵」を見る前に、まず「尼庵」が完成された時期に注目されたい。作品の最後の日付から見ると、陶晶孫が「尼庵」を書き上げたのは一九二二年十二月三日である。その年の十月には、厨川白村の『近代の恋愛観』が改造社より上梓された。実は、この『近代の恋愛観』は前年の一九二一年の九月から十月にかけて、厨川白村が『朝日新聞』の大阪版（15回）と東京版（20回）に連載したものと、その後読者から寄せられた批評に答えるような内容とを一緒にまとめたものである。上述した通り、〈恋愛〉という言葉は明治時代に西洋文化と共に日本に伝わってきた言葉の一つである。しかし、菅野聡美によれば「明治期においては、男女交際や夫婦関係、結婚のあり方は議論されたが、恋愛そのものは殆ど言及されなかった。それが大正になって、大の男が真正面から論じるに値するテーマとして扱われるようになった」という¹⁶⁾。菅野の主張が確かだとすれば、恋愛論の隆盛期は明治、昭和ではなく大正期であることが分かる。この大正期の恋愛論ブームを巻き起こしたのはまさにこの厨川白村の『近代の恋愛観』である¹⁷⁾。

陶晶孫が厨川の『近代の恋愛観』を読んだかどうかは、現存の資料でははっきり断定できない。しかし、陶晶孫を取り巻く当時の環境と人物から、陶晶孫は著名人であった厨川を多かれ少なかれ知っていたと考えられる。なぜなら、陶晶孫が同人の一人であった創造社の初期メンバーである鄭伯奇、郁達夫、田漢、また同じ九州帝国大学に通う親友郭沫若はそれぞれ直接あるいは間接的に白村の文芸評論を引用しており¹⁸⁾、彼らとの交流の中で自然に白村のことを知る可能性が極めて高いからである。また、京都帝国大学は陶晶孫にとって特別な場所である。彼は、一九一九年九月に父親の言葉に従い、不本意ながら九州帝国大学に入学したが¹⁹⁾、志望校は住み慣れた東京にある東京帝国大学か、もしくは弟陶烈がいる京都帝国大学であった。そのため、陶晶孫は常に厨川白村が教鞭を執っていた京都帝国大学に関心を寄せていたのである。

このように、普段から厨川に目を配っていたと考えられる陶晶孫が、大正時代に空前絶後の恋愛論ブームを巻き起こした『近代の恋愛観』を無視することはあり得ない。まして、当時の若者にとって

新聞は社会を知る重要な手段の一つであり、陶晶孫が『朝日新聞』に連載したこの文章を全く目にしたことがないとは言い難いのである。

ところで、『近代の恋愛観』はやはり机上の空論にすぎない。『近代の恋愛観』をきっかけとして〈恋愛〉について大いに論議されたことは確かであるが、当時の若者の心を切実に動かしたのは、何よりも世の中で次から次へ起こる有名人の情死や不倫といった事件である。特に、「近代の恋愛観」の連載中に起こった白蓮事件は当時の人々に衝撃を与えずにはいられなかった。女性から男性宛に新聞というメディアを利用して離縁の宣言を行うというのは前代未聞であり、社会的な反響を呼び起こした。福岡の人物に関わるこの事件が、福岡に在住する陶晶孫の心の琴線に触れないはずがない。このように、非現実と現実の中を飛び交う恋愛論にふれていた陶晶孫がこれらの恋愛論についてどのように考えていたのか、それを知る鍵がこの時期に書かれた「尼庵」のなかにある。

「尼庵」は兄妹の恋愛を語る物語である。「性は人生のすべてじゃない、愛こそ人生のすべてだ」と高唱する兄の恋愛観に比して、妹は「人は恋愛する必要がない」と考えている。一見すれば妹は全く恋愛に関心を持っていないように見えるが、実は妹が追求しているのは俗界から離れた純粹かつ無償の愛である。そのため、大人になった俗人である兄に対する恋心を失うものの、同じ尼庵にいる妙因に特別な感情を抱いている。一方、兄の「愛こそ人生の全て」、「愛こそ人生の根本」という言葉は、『近代の恋愛観』にみられる「Love is best」、「愛は人間生活の根本用件であり」という厨川白村の持論と重なり合う。そのためか、兄の恋愛観を賛美することを陶晶孫の創作意図だと見做している解釈もあるが²⁰、作品を吟味すれば、実は陶晶孫は兄のような有言不実行かつ独占的な恋愛観を批判していることがわかる²¹。

これらのことからわかるように、陶晶孫は妹を通して靈魂に基づく恋愛に賛成し、また婚姻などによって俗世に接しなければならぬことを嫌っている。しかし、周知のように、厨川白村が主張する恋愛観は、〈靈肉合一〉の〈恋愛至上主義〉を賛美するものである。これは、陶晶孫の考えている恋愛観と多少ずれが生じる。陶晶孫の恋愛観は〈恋愛至上主義〉でありながらも、肉体的な交わりや性的欲望を除くプラトニック・ラブである。つまり靈肉二元的な恋愛観である。

4 陶晶孫の恋愛観が生まれた背景

プラトニックラブという恋愛観は当時の日本社会では、特に新鮮なものではなかった。早くも明治二十五年から北村透谷はすでにこのプラトニック・ラブを賛美し論じてきたのである。

恋愛は今世の秘鑰なり、恋愛ありて後人世あり、恋愛を抜き去りたらむには人生何の色味かあらむ²²。

これは、「厭世詩家と女性」の冒頭の部分である。この作品を読んだことがない人でも、明治・大正時代の日本人知識人であれば、上掲の文章を知らない人がいないといっても過言ではない。人生において最も大事なものは〈恋愛〉以外の何物でもないというのは、陶晶孫・厨川白村が提唱する〈恋愛至上主義〉と全く一致しているといえる。一方、肉体と精神との関係について、北村透谷は別のところで次のように話している。

吾等のラブは情欲以外に立てり、心を愛し、望みを愛す²³⁾。

上の文章は妻になる石坂美那子と知り合ったわずか二か月後に、彼女宛に書かれた手紙の中の一部の内容である。「吾等のラブは情欲以外に立て」ということは肉体的な交わりや性的欲望を否定していることが分かる。そのような純粋な恋愛観を持っている北村であるからこそ、一旦結婚すると、「実世界に擒せられたるが為になが理想の小天地は益々狭窄なるが如きを覚えて、最初には理想の牙城として恋愛したる者が、後には忌はしき愛縛となりて我身を抑制するが如く感ずるなり」²⁴⁾と、強く恋愛結婚を批判しているのである。これまで述べてきたように、北村は〈恋愛至上主義〉を主張しつつも〈霊肉合一〉の結婚恋愛論を厳しく批判している。このような恋愛観は陶晶孫のものと完全に一致していることがうかがえる。

通常認識としては明治時代の恋愛観は、〈清い恋愛〉だけを称えるものであったと考えられている。それは無論当時欧米から日本に輸入された恋愛観念に密接な関わりがあったと考えられるが、上掲された北村透谷の文章が当時の日本人にも多大な影響を与えたことは否めない。一九〇六年、つまり明治時代の末頃、日本にやってきた陶晶孫は、まさにそのような社会環境の下で東京にある錦華小学校、東京府立一中、一高で自分の青少年時代を送ってきたのである。

ところで、陶晶孫の恋愛観は上述した当時の日本社会の薫陶を受けた結果と認めながらも、何よりも旧制中学・高校で身につけた知識や教養と切っても切れない関係を持っている。「亡弟陶烈の略伝」²⁵⁾から分かるように、一中時代は彼の一生において重要な時期であった。なぜなら、彼は学習の面でも精神の面でもこの六年間で大きく変わったからである。学習においては、物質の学に対する興味などはこの期間で生じたものである。精神の面においては、この時期を「ロマンの苦悶と憧憬がこの時を以て最大」と語っているように、初恋も少年同士の恋も経験してきたのである。

現在二十一世紀でも同性愛はあまり社会に認められておらず、まして百年前は同性愛を認める人はほとんどいなかっただろう。元々気の弱い陶晶孫がなぜこのような反社会的と思われていたような行為に心が向かったのか。これを究明するために、一中時代・一高時代に彼が置かれていた環境を更に掘り下げなければならない。

厳安生の実証によると²⁶⁾、陶晶孫が府立一中に入学する約一年前に、校長川田正激の着任がきっかけで、当時の府立一中は天地がひっくり返るような変化が起こった。欧米、特にイギリスのパブリック・スクールに憧れる川田校長は「ジェントルマン精神の養成、それによる自由主義の校風の樹立」に力を入れ、「青年は活発であらねばならぬ、澹泊であらねばならぬ、天真爛漫であらねばならぬ」というモットーを掲げた。このような生徒の主体性と個人の自由を尊重する学校で、陶晶孫は六年間も生活を送った。その六年間の生活が彼の性格の形成にいかに関与したのかは容易に想像できよう。後に彼が「自伝」で書いているように、自己中心の憧憬主義や現実と理想の間をさまよう性格はその時に形成されたものである。自己中心の憧憬主義を持つからこそ、初恋あるいは同性愛に違和感を持たずに、行動に移したのではないかと思われる。

実は、このような開放的な教養理念は陶晶孫の学んだ一中だけではなく、その後進学した一高にも存在した。周知のように一高が設立された当初は東洋文化色の強い〈籠城主義〉であったが、新渡戸稲造校長が着任してから一高の校風は少しずつ変わり、「ソシアリティ」や「西洋文化を中核とした教養主義」が重視されるようになったのである。陶晶孫が一高に入ったのは、新渡戸稲造が辞任した

二年後のことで、ちょうどこれまで一高を改革してきた成果が花咲き始めた時期である。一中と全く同じ教育理念の下で、陶晶孫は「魚が水を得たるが如き」²⁷⁾ 成長を遂げることができた。

ところで、このような教育理念は学生にどのような恋愛観を持たせたのだろうか。旧制高校の学生の恋愛観について、嚴安生は次のように述べている。

旧制高校と帝大を通じて全員男子校だった物理的な制約も作用して、もっぱら愛の精神性が高唱されプラトニック・ラブという言葉が流行るなど、観念的なものと恋に対する精神的享受が先行する一般的気風になっていた²⁸⁾。

府立一中・旧制一高という当時のエリートコースに身を置いた陶晶孫が、上述した愛の精神が高唱される恋愛観を持つのはごく自然なことであると思われる。陶晶孫のような、ほぼ日本人のエリートと同じように小学校・中学高校で学んだ人のみならず、成人になってから日本へやってきた中国人留学生の中にも、旧制高校に入ってからプラトニック・ラブという新しい観念に飛びつく人が少なくなかった。ただし、嚴安生が述べているように、男女の性の世界にまだ踏み込んでいない陶晶孫および一般の旧制高校生と比べると、新来の中国人留学生は、「恋愛における精神と肉体の二元性」のバランスを容易に取ることができなかった。そのため、日本に来ると、彼らは「性にばかり目が行ってしまったり、目が眩んだり」²⁹⁾するのである。このような対照的な現象はその後の彼らの作品にも反映されている。性について積極的に語る郁達夫や、肉体や性欲をなんとなく避けているように見える郭沫若と異なり、陶晶孫はそのプラトニック・ラブを徹底的に作品に取り入れ、創作に力を尽くしたのである。

5 むすび

大正時代の日本は明治ほどではないが西洋からの最新思想が次から次へと受け入れられてきた。恋愛に関してもエレン・ケイやエドワード・カーペンターなどの恋愛観が日本に登場し、精神面だけではなく、性的な側面についても積極的に論じられるようになった。このような激変する社会の中で、陶晶孫も影響を受けたに相違ない。

しかし、これまで見てきた九州時代の作品については、肉体より精神的な恋を求める姿勢が一向に変わっていないことが分かる。「木犀」と「洋娃娃」における教師と生徒との愛にしろ、「黒衣人」と「尼庵」における兄弟姉妹の愛にしろ、または、「剪春蘿」にみられる生徒同士の愛にしろ、全て純粋な愛を語り、プラトニック・ラブを描いている。

陶晶孫の恋愛に対するこのような姿勢はその後結婚しても崩れなかった。一九二七年に出版された『音楽会小曲』からみられるように、九州時代の作品にみられるタブーの愛から一般的な恋愛に変わり、創作手法も当時日本で流行っていた新感覚派の書き方を取り入れたほかは、恋愛を性欲、結婚と切り離して語る姿勢は全く変わっていない。

一九二九年一月末、陶晶孫は日本から引き上げ中国に戻った。弱弱しい花のようなロマンチズムの作品が当時の中国の国情にあわないことを³⁰⁾、彼は早くから認識していた。そのため、中国に戻った陶晶孫は『音楽会小曲』に収載されている恋愛作品のようなものをほとんど書かなかった。その後

の彼の恋愛観に変化はあったのだろうか。

この時期の彼の恋愛観をはっきり示しているのはほかでもなく、前述した「恋愛と結婚」である。「恋愛と結婚」は一九四四年に出版された『牛骨集』に載せられた短い文章である。この文章で陶晶孫は、当時の中国人が結婚を前提に恋愛し、また恋愛を結婚に結実させない作品を書くことで信頼を失うことを恐れる文芸作家が、専ら結婚交渉史あるいは結婚生活史について書いている傾向に反感を抱いている。ここでは恋愛と結婚については深く掘り下げていないものの、結婚に至らない恋愛をすることに賛成していることを行間にうかがうことができる。当時の中国の状況を考えると、無論ここでの恋愛が情欲以外の精神的な恋愛であることは言うまでもない。

陶晶孫の恋愛観は我々の想像を遥かに超え、時代とともにあるいは置かれる社会環境によって変化していたのではなく、少なくとも日本の府立一中から人生の幕を閉じるまで、その思想は一貫していたといえる。人は成長と共に恋愛に対する幻想も破滅していくと考えられがちであるが、陶晶孫はその生涯を通して、恋愛世界に幻想を抱き続けたと言えるのである。

注

- 1) 成仿吾「創造社和文学研究会」『創造季刊』(4) 1923年1月
- 2) 楊聯芬「“恋愛”之發生与現代文学觀念変遷」『中国社会科学』2014年第一期 p160
- 3) 郭沫若、田漢、宗白華『三葉集』上海亞東圖書館 1920年5月
- 4) 童曉薇「近代日本社会与創造社知識群体愛情婚姻觀的形式」『深圳大学学报(人文社会科学)』第21卷第5期、2004年9月；宮下正興『以日本大正時代為背景的郭沫若文学論考』博士論文 山東大学、2006年12月等々。
- 5) 中国における陶晶孫研究は、八〇年代までほとんど行われなかった。九〇年代に入って、当時の中国文壇の重鎮であった夏衍が陶晶孫が日中戦争中に上海に留まざるを得なかったのは党からの命令であったことを明らかにしたため、これまで全く取り上げられることのなかった陶晶孫と彼の作品が注目されるようになり、陶晶孫本人および作品について研究する者(嚴安生、小崎太一等)も何人か現れたが、彼の恋愛觀について本格的に論じた者は一人もいなかったのである。
- 6) 1929年6月に郁達夫の後任として『大衆文芸』の編集者となり、10月に夏衍・鄭伯奇・潘漢年らとともに上海芸術劇社を創立することなど。
- 7) 陶晶孫「恋愛与結婚」『牛骨集』上海太平書局 1944年5月
- 8) 陶晶孫「再會罢，文壇」『大陸新報』1944年11月23日、『陶晶孫選集』所収(丁景唐編人民文学出版社 1995年) p364
- 9) 同上
- 10) 攝生「讀了『創造』第二期後的感想」『學燈』時事新報館編輯 1922年10月12日
- 11) 朱寿桐『朱寿桐劇曲』江西高校出版社 2002年4月 p347
- 12) 詳細の内容は拙論「『黒衣人』について」を参考されたい。(『熊本大学社会文化研究』7号 2009年)
- 13) タイトルはフランス語で書かれているが、本文は日本語で書かれている。
- 14) 陶晶孫「木屋」『創造季刊』第一卷第三期 上海書店 p69
- 15) 詳細の内容は拙論「『運命』という視点からみた『木屋』と『洋娃娃』」を参考されたい。(『野草』84号)
- 16) 菅野聡美『消費される恋愛論——大正知識人と性——』青弓社 2001年10月 p15
- 17) 北村透谷の「厭世詩家と女性」、澤田純一の『大恋愛学』、岩野泡鳴の『男女と貞操問題——僕の別居事実と自由恋愛論』等、明治時代から大正時代に至るまでに発表された〈恋愛〉に関する書物は枚挙にいとまがない。しかしながら、知識人のみならず、一般の民衆にも〈恋愛〉に関心を持たせたのはほかでもなく、恋愛論ブームの主軸となった厨川白村の「近代の恋愛觀」である。
- 18) 方長安「五四文学發展与厨川白村的『苦悶的象徴』」『江漢論壇』第九期 2002年
- 19) 中村悳二「日中の鏡——“陶晶孫”氏の事績を偲ぶ」原載『経友』No. 133、東京大学経友クラブ、1995年10月 p100。『陶晶孫百歳誕辰記念集』所収。
- 20) 楊劍龍「一朵柔弱美丽的花——论陶晶孙的小说创作」(『陶晶孫百歳誕辰記念集』百家出版社 1998年) などがある。

- 21) 詳細の内容は拙論「陶晶孫『尼庵』論——『近代の恋愛観』との関係を中心に」を参考されたい。(『生活・言語文化』国際交流研究会研究論文集 熊日出版 2011年3月)
- 22) 北村透谷「厭世詩家と女性」『北村透谷選集』所収 岩波文庫 1970年 p 81
- 23) 石坂美那子宛書簡、1887年9月4日(江刺昭子『透谷の妻 石坂美那子の生涯』所収日本エディタースクール出版部 1995年 p 118)
- 24) 同18) P89
- 25) 陶晶孫「亡弟陶烈略伝」『陶晶孫選集』所収
- 26) 巖安生『陶晶孫 その数奇な生涯——もう一つの中国人留学精神史』岩波書店 2009年3月
- 27) 同上 p 56
- 28) 同上 p 173
- 29) 同上 p 174
- 30) 陶晶孫「晶孫自序」『晶孫全集』初出、『陶晶孫・代表作』所収(中国現代文学館編 華夏出版社 2009年) p 109

【付記】本論文は二〇一四年度電子科技大学中央高校基本科研助成金「自然科学基礎における創造社初期文学に関する研究」(No ZYGX2014J123)の成果の一部である。

Tao Jingsun's Exploration of Love From His Literature in Kyushu Imperial University

Liao Liping

(University of Electronic Science and Technology of China)

As one of the early members of the *ChuangZaoShe*, TaoJingsun published five short novels during his time at Kyushu Imperial University (1919.9-1923.3), which offer different perspectives to describe different forbidden love. But his views on love were never explicitly expressed in his other four novels except the *Ni An*. An important background fact is that *Modern View of Love* by Kuriyagawa Hakuson was very popular in Japan when he was writing this article. Though both of them prioritized love, TaoJingsun was consistent in insisting that traditional Plato's dualism between body and soul was very different from the pursuit of harmonious combination of minds and bodies by Kuriyagawa.

To interpret *Ni An* in this paper, we can find his view of love is Platonic love, and further it's closely related to his growing experience in Japan.